「Stone Time」

「アートガーデン」

「SHADE GARDEN」

「ワインバーにて」

ぁ

NO.42 2003.12

aaca

社団法人日本建築美術工芸協会

アピアランス

aaca法人会員

(株)タカタ
茨城県西茨城郡友部町旭町255
TEL0296−77−1173

「Stone Time」
1250×6200×1100㎜

小野行雄氏監修により、白御影石の代表格、稲田石をベースに黒御影石とステンレスで抑揚を持たせました。緩やかな曲線と様々な素材を活かしたデザインになり、シンプルでかつ重厚感があり、優雅さを感じさせる作品です。

aaca会員（株）竹中工務店 設計部 総括部長
建築家
KAWAKITA EI
川北　英
東京都中央区銀座8丁目21−1
TEL03−3542−7100

「アートガーデン」
設置場所：岡山市

現代建築を100年後に評価したらどういうことになるか。経済優先の建築としてはあまり面白くない時代だったという評論家の声が聞こえてきます。その声を打ち消すためにも既成の概念を越えること、異世界を侵略すること。それが今の私のテーマです。

aaca会員
NAGARA YOSHIKO
名柄禎子
東京都世田谷区東玉川1−22−18
TEL03−3729−6231

「SHADE GARDEN」
194×260㎝

絵画は平面ですが建築とコラボレイトすることによって空間に心地よい空気を醸すことが出来ます。絵画のもつこの要素を空間構成に積極的に採用される時代を夢見ます。

aaca会員
フラワーデザイナー
MORIKAWA HIROMI
森川ひろみ
鎌倉市二階堂373−5
TEL0467−24−5545

銀座のワインバー

食卓からパーティーテーブルまで、花のある生活をこの作品は、ワイン色のトルコキキョウとイタリアの習慣にならって青いムギをアレンジしました。花器はイタリアのテラコッタです。

故　芦原義信会長におかれましては本年初夏の頃より入院療養中でありましたが、加療の効なく平成15年9月24日ご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を捧げさせていただきます。

芦原会長のご死去に際しては、当会にとりましてあまりにも突然のことであり困惑いたしたところでありますが、会長空白の状況では今後の会運営に支障を来し兼ねないことと推察し、去る10月28日定例理事会において、阪田誠造副会長理事に通常総会（2004年6月）まで協会会長職を務めていただくことに理事会全員一致で決定いたしました。

CONTENTS

芦原会長を偲んで ……1
時代の華一輪 ……4
aacaトーク ……6
aaca見学会に参加して ……9

■表紙デザイン
高部　多恵子

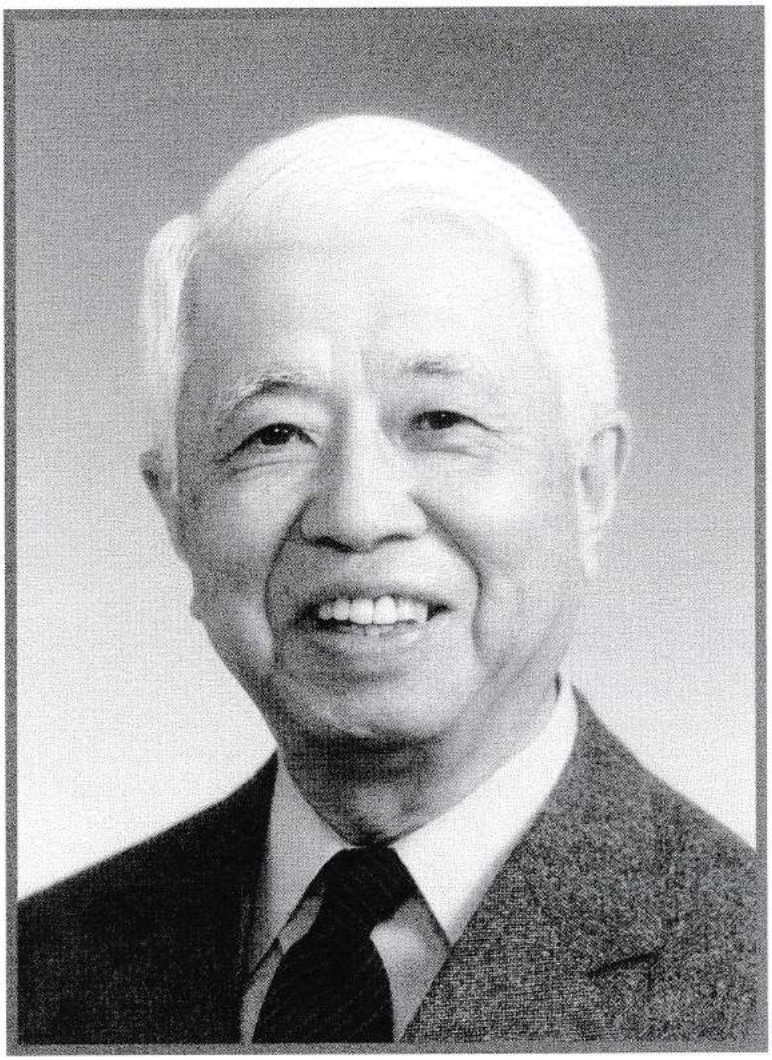
表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合わせください。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行いますのでご了承下さい。

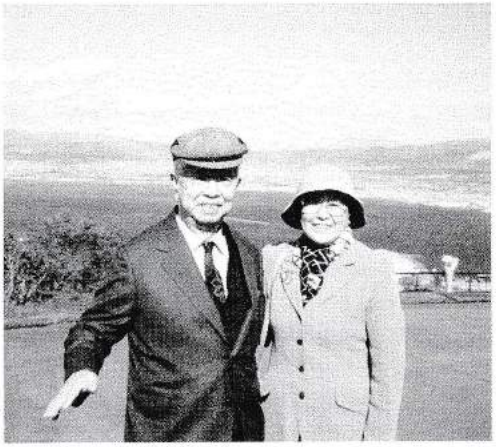
発行：㈳日本建築美術工芸協会
Phone03-3457-7998
Fax　03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館6F
URL：http://www.aacajp.com
E-maill：info@aacajp.com
郵便振替：00110-2-365085
編　集：(社)日本建築美術工芸協会　広報委員会
委員長　玉見　満
副委員長　高部多恵子
北村孝昭、石田眞人、山崎輝子
長谷川亨、瀬川秀之、佐田興三
事務局長　伊藤留雄
制作協力：中栄印刷工業株式会社

aaca新会長
(株)坂倉建築研究所最高顧問
SAKATA SEIZOU
阪田誠造

故 芦原会長を偲んで

芦原先生の思い出





社団法人「日本建築美術工芸協会」を設立以来15年間、建築・美術・工芸を総合し、文化の交流発信に大きな貢献をされた会長、芦原義信先生のご逝去に対し、全会員の哀悼をここに捧げます。

芦原先生には、坂倉準三建築研究所の縁で、私は日本建築美術協会入会以前から、ご指導ご高配をいただきましたが、先生のお人柄や多彩な才能には、交流が深くなるに従い敬服と魅了を一層大きく感じるばかりでした。

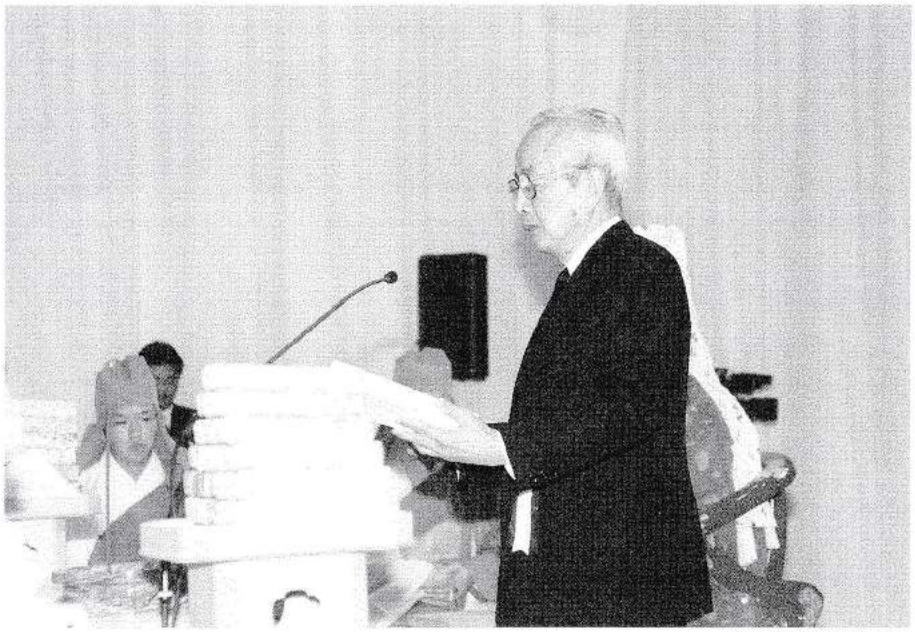
先生は殿様の風格と同時に、公明大義の精神を強く持っておられたと思います。先生のお住居に、先生の人間性の現れを感じます。西原の住居と軽井沢の別荘に、執筆・読書・スケッチに集中された独特の書斎に共感を覚え、庭に愛用された露天風呂があるのも興味深い発見でした。

先生ご夫妻と旅行する機会を持ったことで、忘れられぬ思い出が残りました。昨年、 AACAの函館シンポジウムの折、先生ご夫妻が仲良く肩を組まれ函館山麓の街区を楽しく歩かれていたお姿が、今もありありと目に浮かびます。数年前のヘルシンキで国際シンポジウムの折、先生ご夫妻と芦原事務所OBの方々と一緒に、私たち夫妻も共に楽しい数日を過ごしました。フィンランドは先生が最も親しまれ愛された土地、建築と知りました。国際シンポジウムでの見事な英語の記念講演を聞き、私たちはその後アアルトの建築始め見学ツアーと、芦原事務所OBでフィンランド人と結婚された方のお住居でのパーティに参加しました。その湖畔の別荘では、サウナに入った後、前の湖水に真裸のままとび入るなど、フィンランドを満喫した楽しい旅でした。先生も終始全く同じ、裸のお付き合いの仲間でした。こんなに早く亡くなられるとは。まことに残念の極みです。

先生が鋭意築かれてきた「日本建築美術工芸協会」の発展を目指して、今後は全会員が共に力を合わせ、より一層の尽力を継続することを誓いたいと存じます。

故 芦原会長を偲んで

弔辞



日本芸術院長　犬丸　直様

日本芸術院会員、芦原義信先生がご逝去され、本日ここに先生のご葬儀が営まれますことは、誠に哀惜に堪えないところであります。

先生は、大正七年東京に生まれ、昭和十七年東京帝国大学建築学科を卒業されその後、同二八年、戦後初の留学生としてハーバード大学大学院に学ばれデザイン学を専攻し、帰国後の同三一年芦原義信建築設計研究所を設立して数々の名建築を設計され、我が国を代表する建築家の地位を確立されました。また、そのかたわら東京大学、武蔵野美術大学、法政大学等の教壇に立たれ建築学及び都市計画論その他の教授・研究に励まれ、また、国際的に活動されるとともに、後継者の育成にも力を注いでこられ、我が国建築界の第一人者として活躍されました。

この間、先生は数々の建築設計に携わりその作品群は日本建築界に大きな刺激を与え続けられ特に昭和四二年のカナダ・モントリオール万国博（日本館）の建築は、日本の伝統美をみごとに結晶させた作品として世界的な注目を集め、その年度の芸術選奨文部大臣賞を受賞され、国の内外における建築家としての地位を揺るぎないものとされました。また、昭和五九年には国立歴史民俗博物館の建築設計に対し、建築における正当なモダニズムを継承する者として、また理論と実践との調和の優秀さは、国際性を帯びた作風とともに建築界に大きな影響を与えていると高く評価され、日本芸術院賞を授賞されました。

先生は、建築を単に建造物としてみるのではなく、都市計画、環境論のなかで的確に把え、特に（街並みの美学）を発想源にして数多くの作品を発表されてきましたが、その具体的な理論を著作『街並みの美学』として昭和五四年に刊行され、その発想と理論は建築界はもとより広く文化界一般に新鮮で強烈な文化論・文明論として受けとめられ、好評を博しました。この著作は、世界各地を調査取材され、三十年に及ぶ長い年月のテーマ追及を結実させたもので、その成果により毎日出版文化賞を受賞されました。このほか「続街並みの美学」「隠れた秩序―二一世紀の都市に向かって」などの著作や翻訳によって斯界に大きく寄与されてきました。

一方で先生は、日本建築家協会会長、日本建築学会会長を務めたほか、昭和五九年建築と美術工芸を結ぶ唯一の組織である日本建築美術工芸協会を設立し、以来会長として同協会を束ねてこられました。永年にわたるこうした多くのご功績により、昭和六三年十二月には日本芸術院会員に推挙されました。さらに平成元年に、勲二等瑞宝章、同三年には文化功労者、次いで、同十年には文化勲章の栄誉に浴せられました。

建築学会賞をはじめ各種建築コンペの審査員を務めるなど、わが国建築界の重鎮として第一線にあって活躍されるとともに世界各国の著名な建築家との交流を深められ、国際的にも信頼と名声を得られてきました。

今後とも末長く我が国建築界の第一人者であり、貴重な存在として、ご活躍いただけるものとご期待していましたところ、突然幽冥界に旅立たれたとの報に接し、痛恨胸に迫るものがあります。

日本芸術院は、ここに先生のご逝去を悼むとともに、生前の多大なご功績に対して限りない尊敬と感謝を捧げ、謹んで弔辞を呈します。

故 芦原会長を偲んで

弔辞

建築評論家　馬場璋造様

芦原義信先生の御霊に、謹んで哀悼の意を捧げさせていただきます。

今年の春、ご自宅へお見舞いにお伺いした折には、お元気なご様子で安心しておりましたが、ご逝去の報をお聞きして呆然といたしました。日本建築界の重鎮として、まだまだ私たちを見守っていただきたいと、思っておりました。

どんな会合でも、先生がちょっとだみ声の大きな声で話されますと、席がいっぺんに明るくなりました。また軽妙洒脱なご挨拶や乾杯の音頭で、いつも会を盛上げておられました。そうした先生のご活躍振りを、私は止まることを知らない高速回遊魚のようだと申し上げたことがあります。その芦原先生がおられなくなるとは、いまだに信じられない思いで胸がいっぱいです。

芦原先生が日本建築界の近代化に果たされた役割は、まことに大きなものがありました。建築家としてのアメリカ留学に先鞭を付けられ、その後の豊かな国際経験を踏まえて、日本の建築が欧米に伍していく自信を、私たちに与えてくださいました。「ビー・オリジナル！ビー・クリエーティブ！」というお元気のよい言葉に、先生のお考えが端的に言い表されていました。

建築家としての処女作である「中央公論ビル」が日本建築学会賞を受賞されたのは、先生の建築家としての天稟の資質によるものであるとはいえ、稀有なことでした。その後の設計活動も順調に王道を歩まれ、東京オリンピックの「駒沢オリンピック体育館」、数寄屋橋の「ソニービル」、芸術選奨文部大臣賞受賞の「モントリオール万国博・日本館」、日本芸術院賞を受賞された「国立歴史民族博物館」、それに「富士フイルム本社ビル」、「第一勧業銀行本店」、「金沢市文化ホール」、「東京芸術劇場」など、心の記憶に残るすばらしい建築をつくり続けてこられました。

また設計活動だけではなく、法政大学、武蔵野美術大学、東京大学での教授として、さらに海外の大学でも客員教授として後進の指導に当たられ、「街並みの美学」「外部空間の設計」「隠れた秩序」など、都市と建築の関係を研究した著書を出版され、学術面でも大きな功績を残されました。

アーキテクトとして、プロフェッサーとしての優れた指導力は、日本建築家協会会長、日本建築学会会長を歴任されたことにも現われています。芦原先生のほかには、いまだ両会の会長を歴任された建築家はおられません。とくに日本建築学会会長としては創立100周年記念行事の任に当たられ、「開かれた学会」をモットーに掲げ、建築の文化的意義を社会に大きくアピールされました。そして長年、日本建築美術工芸協会会長として、関連分野との交流にも尽力され、建築界最高の賞である日本建築学会大賞を受賞されておられます。

また先生は、数々の建築コンペの審査委員長として、建築文化の発展に大きな役割を果たされました。私も、北九州メディアドーム・コンペや、横浜国際客船ターミナル国際コンペをはじめ、数多くのアイディアコンペ、高松宮記念世界文化賞の選考などでお付合いをさせていただきましたが、それらも、いまとなっては懐かしい思い出となってしまいました。

こうした芸術・学術面にわたる幅広い偉大な功績に対して、日本芸術院会員に推挙され、文化勲章を受章されるとともに、世界各国からもさまざまな賞を受賞されています。

先生のご逝去によって、ぽっかりと空いた大きな穴を、残された私たちはどのように埋めていったらよいのでしょうか。

先生の教えに従い、クリエイティブな建築、開かれた建築を目指すことが、私たちのせめてもの責務だと思っております。

幸い、ご子息の芦原太郎さんは、建築家として国内外で活躍されるようになっておられますので、必ずや先生のご遺志を受け継がれることと思います。

芦原先生、心安らかにお休みください。

時代の華一輪

aaca理事
(株) 久米設計　代表取締役社長
OKAMOTO MASARU
岡本　賢

東京都江東区潮見2－1－22
TEL03－5632－7811

フレンチシャトーへの旅

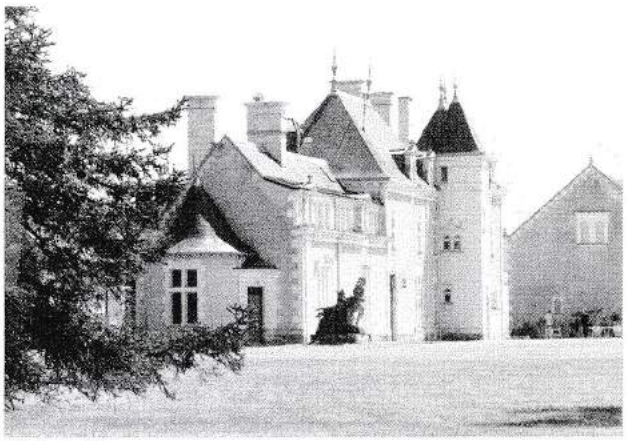
恵比寿ガーデンプレイスの中央に、何故フランスのシャトーがあるのか度々質問されてきました。その度に曖昧な答えをしてきましたが、計画当初の様々な検討の中でこの計画、この地域全体を象徴するシンボル性が必要となり、何故かと人々が思い、その光景にとらわれ、その風景に魅惑される何ものかが必要でした。一般的には象徴的なモニュメントを置いたりという例が多く、またヨーロッパに旅しますと広場の中央にみごとな噴水があり、空間を引締めています。都市の中で彫刻やモニュメントは、空間の質と性格を決める重要な要素となっています。我々の計画チームはヨーロッパのひだの多い陰影に富んだ都市空間に魅せられ、計画の中心に広場を創り、存在感の強いモニュメントを模索していました。そんな所へ食文化の象徴としてワインとレストランをアピールする事業計画が提案され、フランスのシャトーをそのままこの地へ転居させようと試み、ロアール川沿いに点在する10ヶ所以上のシャトーを調査する事になりました。フランスでもシャトーを維持していくのは大変な事で、多くは廃屋に近い形で放置されていたり、プチホテルとして細々と存続している物ばかりでしたが、その姿は魅力的で彫刻的で存在感を感じさせる物ばかりでした。その一つと実際に買収交渉に入りましたが、古建築は文化財と見なされ、解体搬出は不可という行政庁の判断で未遂に終りました。

それにしてもそのモニュメント性は強烈で、他に代えられない思いが強まり、新たに設計して全て現地産材で建築したのが現在あるシャトーです。出来上がった空間は多くの方々に見て頂いていると思いますが、現代建築の巨大な壁に囲まれた正面に、古典的な彫刻のようなシャトーが小さく置かれている広場は、何となくシュールで不可思議なイメージが出来たのではないかと思っています。

そして何故シャトーなのかと多くの人に問われ、キッチュだとか、多くの批判があったり、女性の方々からは概ね好評であったりとか、様々な反応がでて、やはりインパクトが強く、その存在が恵比寿ガーデンプレイスになったのだと実感しています。

建築もやはり一つのアートワークなのです。実際に調査してきたシャトーの写真を見て頂きたいと思いますが、なんと魅惑的な姿をしている事でしょうか。生活の場がそのまま芸術作品なのです。

シャトードロジエール



シャトーダセイ

シャトードラヴリラジェ

時代の華一輪

aaca理事
(株)佐藤総合計画　常務取締役
OONO MASARU
大野　勝

東京都墨田区横網2－10－12
TEL03－5611－7205

中国プロジェクト

近年中国でのプロジェクトにかかわっている。その中でも最初の広州市国際会議展示場が10月に正式オープンした。4年前に華南地区の中心都市・広州市で、世界最大規模（全体計画で延60万m²）の展示施設が計画されていた。その設計者選定にあたり、国内外12社の設計事務所が指名された国際コンペが行われ、幸い、当選を果たしたプロジェクトだ。

その提案にある、広州市の中心を流れ、敷地に隣接する「珠江」から穏やかに吹き込む風＝「飄」のイメージから喚起される、やわらかな外観デザインや水と緑の環境計画などが評価されたと言う。

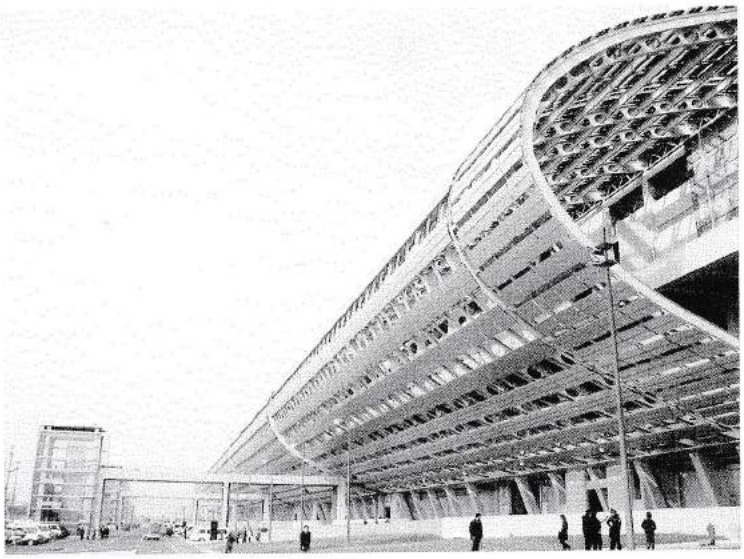
その案を具現化するための設計・監理プロセスは、日本では考えられないことが数多く起こった。最初の契約時では、中国の諸制度が確立していない部分も多々あることから、条項の細部に渡る協議に時間と神経をすり減らすハード・ネゴシエーションとなった。

設計プロセスでは、中国国内の設計事務所との合作（J・V）の実務調整に苦労した。ただ、デザイン上重要な部分のディテール作成などは地元に任せずに、自ら直接担当し提案デザインを深化・発展させた。

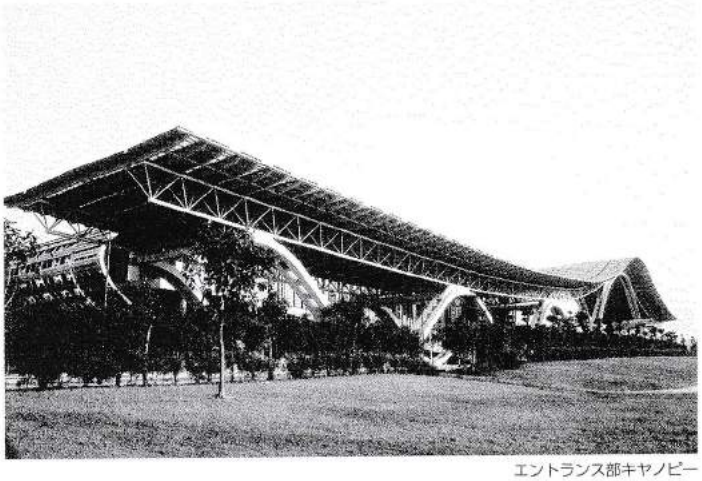
工事面では、分離発注方式の工事施工が行われているため、各工事の「はざま」の調整や専門メーカーとの主にデザイン上のディテールの詰めなどに時間は取られたが、予想以上に協力的で、技術力も高かったのは印象に残る。

このように、契約から設計監理面全てにわたって苦労の連続ではあったが、完成した建物は心配していた施工面では、鉄骨工事や内装工事も良いものであった。

周辺の環境整備の充実さも特筆すべきであろう。広場、植栽、噴水、水と緑のウォーターフロント、樹間駐車場、サイン（GKデザイン）などの整備は目をみはるものがある。我々の提案に従い、市の積極的バックアップのもとに施工されたものだが、建築がより一層引き立ち、外部空間を含めた、水と緑の展示「環境」が創出されたのも日本ではなかなか経験の出来ない出来事であった。



外観・飄



エントランス部キヤノピー

噴水

版画家　日本版画協会会員
KUSAKA KENJI
日下　賢二
相模原市東大沼2－18－3
TEL042－741－0814

版画と青春

敗戦直後日本は、それまで抑圧されていたものが一気に吹き出したように、文化の面に於ても我が郷里岡山県津山市も熱い風が吹き荒れていた。当時学校が夏休みに入ると毎年それぞれの学校で市内在住の画家が必ず絵の夏期講習会を開いていた。小学四年生頃から私は講習会楽しみに毎年参加していた。

私が、版画家を志すきっかけとなった昭和二十四年の講習会、講師の一人に津山出身の創作版画家永礼孝二氏がいた。先生は戦火をのがれ郷里津山に疎開していたのであった。

この講習会を期に、私が昭和三十三年に上京するまでの数年間私は先生にご指導を受けた。その間私は寝食を忘れ版画作りに没頭の明け暮れであった。が、やがて私の内部に得体の知れない何にかがしのびより、無気味な影を落としていたのである。当時日本にも抽象絵画の嵐しが吹き荒れていた、まさに抽象の全盛期であったのだ。

何時の間にか私も青春と云う多感な年齢にさしかかっていた、私は打ちのめされ同時に憧れたのだった。

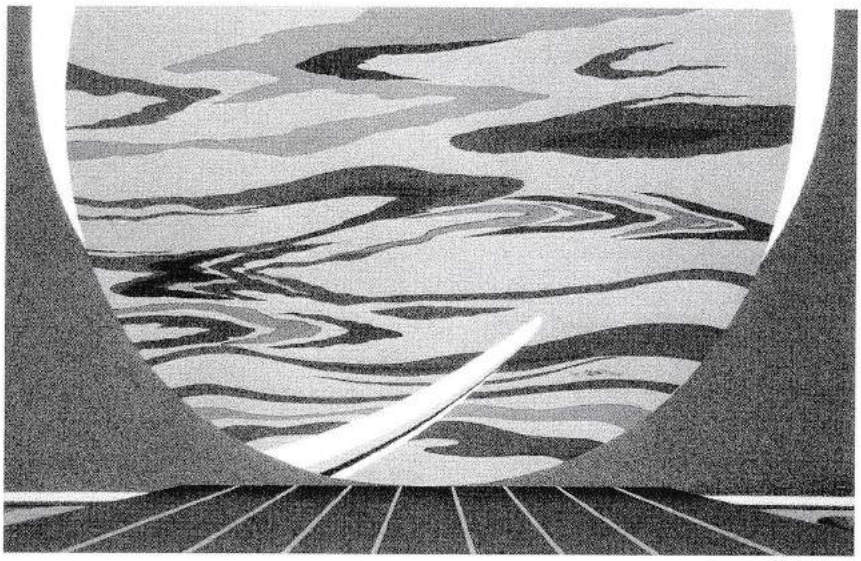
これまでの自分の表現に疑問を感じしだいに鬱屈し、出口のない苦悩のやるせない日々―。

私は、ひそかに郷里を捨て上京することを決意し上京したのだった。

だが私の青春時代の挫折は、まさにひとつの巨大な壁であった。東京での戦いは生活もさることながら、寝食を忘れ没頭していた頃の作風を否定し、しかしその先が見えない苦悩の連続の日々であった。が、あるきっかけで竹林、竹のイメージをつかみ、くり返しくり返し制作していく内、しだいに薄皮を剥ぐように希望と光を確かな形で全身に感じ取ることができたのであった。それが私の垂直による作品の誕生であった。

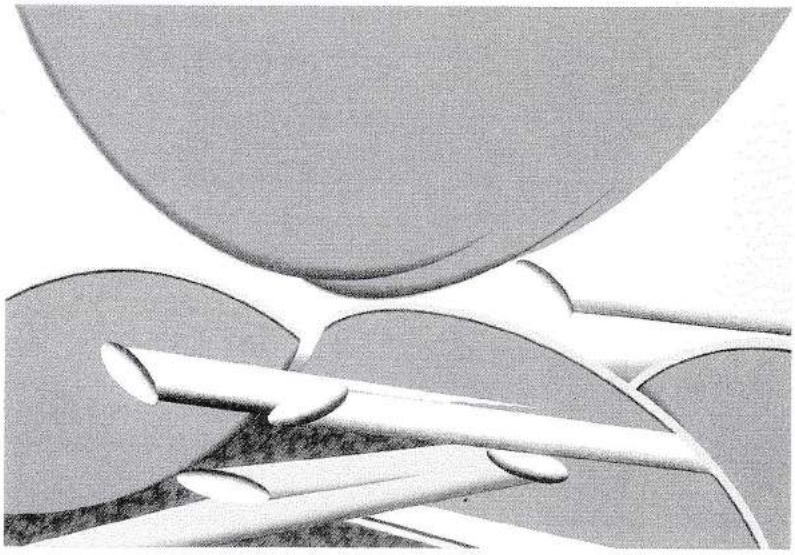
垂直が除々に斜線へと変化していった。更に、私が郷里でこよなく愛した風景山畑があった。

褐色の土が曲線をなしていく重にも交差し頂上までうねり、空にとけ込んで行く。この風景は私が曲線で表現する源点となっている。



希望の彼方へ

予感95-2　木版　55×79cm 1995



aacaトーク

aaca会員
『住文化を考える会』主宰
MIYAZAWA SHOUHEI
宮澤　昭平

東京都練馬区南大泉3－22－13
TEL090－5514－4154

住文化とは何か？

これからお話をします住文化とは衣食住の住の部分に関する文化のことです。日々生活をしている住いの文化、一戸建住宅又は集合住宅における文化です。戦後流行しました文化住宅や文化生活や長屋文化談義のことではありません。

衣食住の衣と食については価格を別にして品質・数量・価値ともに満足です。衣と食については先進国を既にクリアーして世界のトップレベルにあります。百貨店・ショッピングセンター・ブランド店・諸外国に行けば判断できます。

ホテルレストランに行けば判明し・専門店に行けば、世界の商品が買えます。世界の文化を吸収して、日本独自の新しい衣食文化を、創造しつつあります。

住（住い・住宅・住居・ねぐら）は衣食と逆比例して大幅に見劣りがします。一戸建住宅会社とマンション分譲会社は戦後の高度成長で共に成長しました。大量に住宅を供給しましたが、文化については、議論されて来ませんでした。供給側の商品企画と建設販売（大量生産大量販売）で規模は巨大化しました。ここに来まして、需給バランスの変化と意識改革による変化が出てきました。

平成12年10月、品確法の施行により、品質性能表示が義務付けられました。其れより21世紀の住宅は本物志向の風潮（百年住宅）が芽生えてきました。土地・建設・金利・資材・作業の全ての面でコストの値下り顕在化しました。住文化を十分に取り入れた優良住宅を建設するチャンスの到来となりました。住宅20年・集合住宅30年で建替えの時期にきている建物が多数あります。『今度改築するなら親子孫まで三世代住める百年住宅を建てたい』ニーズ。『今度改築するなら日本の住いの和風の文化を加えて建てたい』ウォンツ。田舎に育った人は子供の頃に生活した田舎の大きな住宅が懐かしくなります。田舎には農耕民族として田畑を耕して生活した歴史と文化と風習があります。

住はこれで良いのか？　文化はあるのか？

『住文化』のディスカッションをしよう！。
『住文化を考える会』に参加しよう！。
『住文化クラブ』に参加しよう！。

縄文文化・弥生文化そして奈良文化、織田信長の戦国時代の文化・豊臣秀吉の安土桃山文化、徳川家康による天下統一後の江戸幕府に育まれた日本の文化は、徳川十五代将軍徳川慶喜の大政奉還（1867年11月）により変わってしまった、明治新政府成立は西欧文化を取り入れた洋風化が推進された、その後第二次世界大戦の敗北、更にバブル後の経済の退潮等により、日本古来からの住文化は著しく変化変質変貌してしまった、『文化の議論いたしましょう！』。

問題提起！

三世代住める百年住宅『ニーズ』日本の和の文化を加えて建設『ウォンツ』。住文化のあり方は生活者（住人）である（中身の問題）。変わらないものは不動産（土地）である（動かぬ問題）。変わり得るものは建築物（建物）である（施工の問題）。住宅（家）は消耗品になってはならない（建築美術工芸品）。住宅（家）は寄宿舎になってはならない（永住定宿文化舎）。

住宅（家）は仮設舎になってはならない（本建築伝統建物）。

調査分析評価・開発企画誘致！

100年持つ住宅を調査分析研究開発しなければならない。木造でも100年持つ住宅を開発建設しなければならない。気候風土と四季を睨み見据えて建設しなければならない。建築物（建物）の中身こそ文化・藝術であり価値である。建物構築推進するのも理解する人（ひと）の問題である。理解する人を増やすにはディスカッションする事である。

気候風土（四季折々の季節感覚・旬・芽生え・花鳥風月）。行事（儀式・習わし・仕来り・所作・作法・法会・会合）。

伝統（風習・制度・思想・学問・藝術・信仰・培い伝え）。

住の和の心を求めて！

明治以降：和から洋へ。
21世紀：洋から和へ。
本年は紀元（皇紀）2663年である。

本物の文化と歴史と伝統は受け継がれているのか。

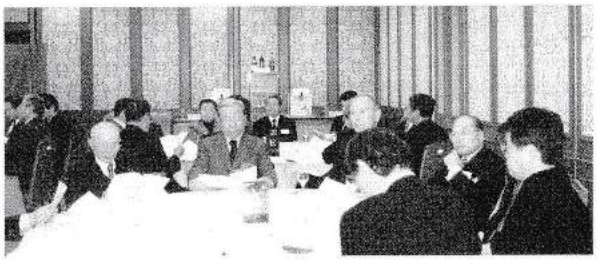
本人自身として文化を後世にきっちりと告げることができるのか。

本当の住文化はディスカッションにより理解され育まれ再発見される、と信ずる。

写真：第1回住文化を考える会
ホテルオークラのスナップ（2001.2.27）

右から　大崎磐夫氏　清水重男氏　宮澤昭平　手前　中村達夫氏

話中　清水重雄氏と宮澤昭平　右　大崎磐夫氏



中央奥　オークラオリジナル地ビールサーバー2台。
醸造　ホテルオークラ福岡　ブルワリー。
地ビールプラント。
種類　Gold Pilsner/Kupfer Weizen

aacaトーク

aaca会員
和紙彫塑家
UCHIUMI KIYOHARU
内海　清美

東京都清瀬市元町2−24−22
TEL0424−92−9591

空間物語・芸術による源氏物語

「いづれの御時にか。」ではじまる『源氏物語』。引目鉤鼻の表情で描かれた国宝『源氏物語絵巻』。いずれも日本を代表する物語と絵巻物で、前者は文学、後者は絵画です。私はこの二つの要素を融合し、より強く見る人の感性に訴える美術形式を探索してきました。それが「空間物語芸術」です。

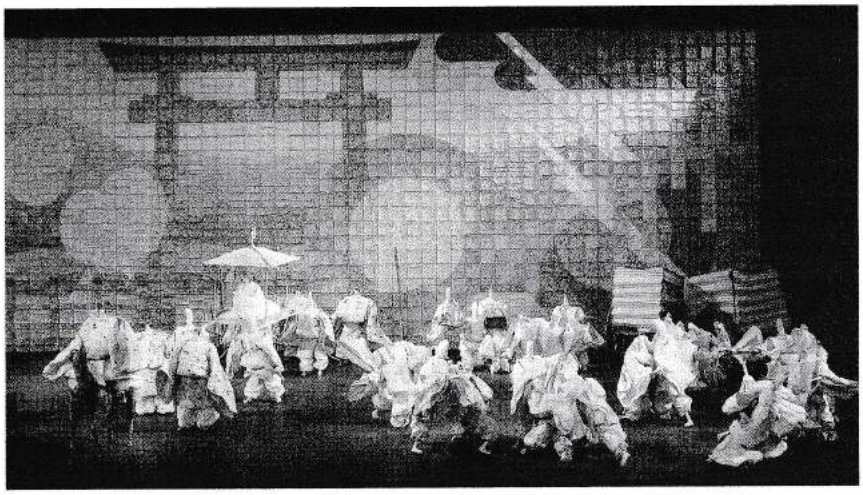
和紙での人がた表現を、私は彫刻造形として捉え、「彫塑」と呼びます。「彫塑」は彫刻技法の一つで粘土で塑形し、人物の内面をとらえた量塊的存在美の表現です。私は、内面から生れる動勢（インモーション）の一瞬をとらえ一気に凝縮させる造形を心掛けます。それ故、動かない彫塑が見る人の内であたかも自在に動き出すのです。またこれらが群体になると、重層的な物語イメージが生れ、群像美が成立します。各ステージを彫塑群と背景の和紙タイルのモザイク画で三次元に構成し、鑑賞視野を無限に拡大したのです。

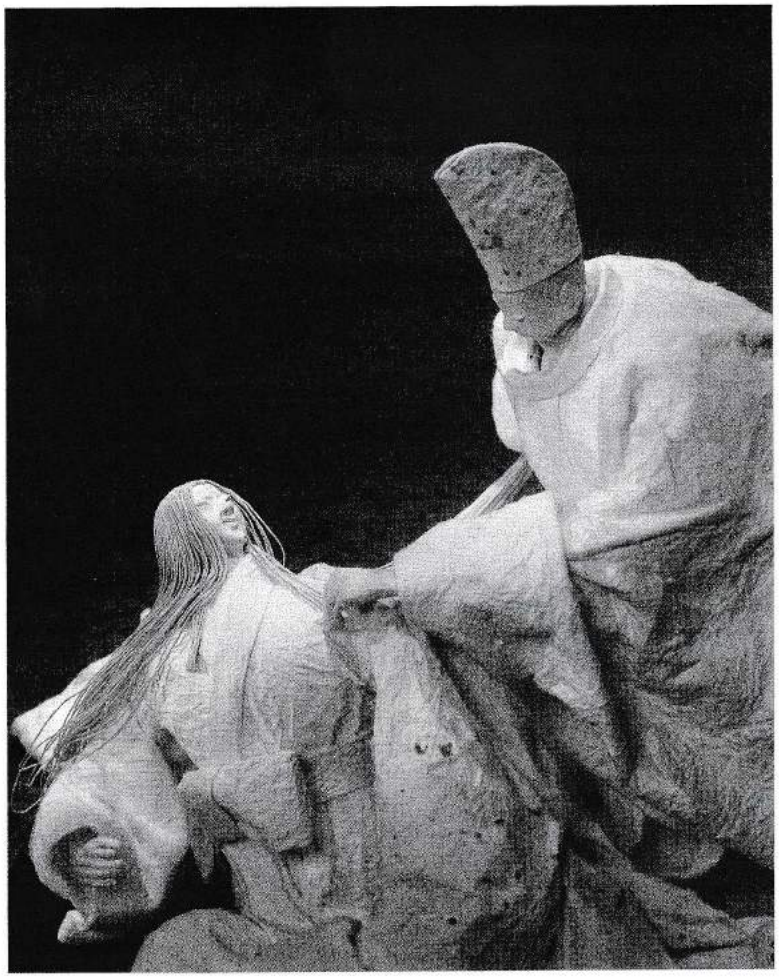
人物の表現では特に瞳（黒目）を作りません。これはそのキャラクターを特定せず、見る人のイメージに主体を置いたからです。

白い和紙素材の考察。和紙は光を内部に吸収し、にじみ出すようにそれを解き放ち、表面の皺の変化で多彩な陰翳美を醸し出し、このフラジャイルな情感が「もののあわれ」を一層増幅させます。しかし、源氏物語の衣裳、四季の行事、風物は豊かな色彩に満ちていますがあえて白で表現します。「白い色」は観る人にあらゆる色を連想させ、豊かな本当の色を想起させると考えます。

ところで、彫塑した女たちは皆苦しみをたたえていました。私はこれを男の煩悩と女の理性の葛藤としてとらえました。この物語で紫式部は女の解放を訴えていたのです。

この内容も含め、イメージを増幅、拡大させてくれる白い和紙と瞳のない彫塑群で演出された三次元物語、これに照明と音楽の力を加え新しい幽玄美の空間物語芸術『源氏物語』を作り上げました。





aaca見学会に参加して

aaca調査研究委員会委員、情報委員会副委員長
アートフロントギャラリー
ISHII HIROMI
石井　博美
東京都渋谷区猿楽町29－18　ヒルサイドテラスA棟
TEL03－3476－4868

「里山とアートを見てきました」

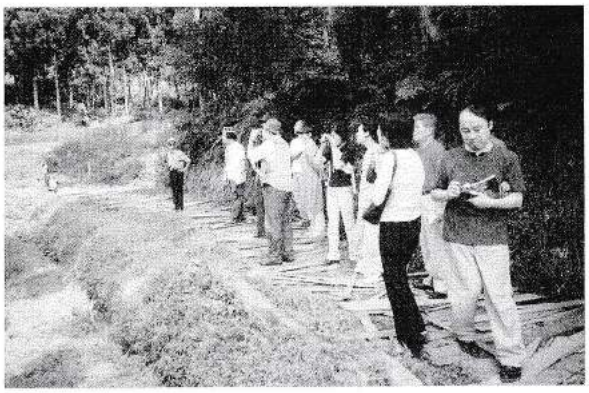
8月の24、25日に協会設立15周年記念企画事業の一つとして「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2003」見学会が36名の参加をみて行われました。一泊2日の小旅行は越後湯沢からバス2台に分乗し、昼間のほとんどの時間を乗り物の中で過ごすというハードなものでしたが、参加者は里山に展開する作品と生活の数々を充分に楽しまれたようでした。

新潟県が県内の広域地区振興策として「里創プラン」を打ち出したのが1995年です。新潟県内部長野県境の十日町市・川西町・津南町・中里村・津南町・松之山町からなる「妻有地区」6市町村、762㎢、人口78，000人はアートを契機とし、地域作りの連携をはかる「越後妻有アートネックレス整備事業」として10年にわたる事業に着手しました。その内容は、

1）　旅行者、住民による地域の特徴、良い物探しのための写真とコトバによる「ステキ発見」
2）　広域の連携と修景のための「花の道」づくり。
3）　地域の交流、発信、展望づくりのための拠点としての「ステージ」づくり。
4）　もともとある道路、公園、コテージ事業にアートを可能な限り導入する、ステージにアートを活用する、その他に独自の予算を組み、すべてを三年に1回アートトリエンナーレ「大地の芸術祭」として発表する。

というものです。

4）で挙げられている第1回の「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2000」は2000年に行われ、美術が地域振興の中心的な役割を担う試みとして世界的な話題となりました。第2回目の開催となる今回は三つのステージも整備されて前回を上回る規模となり、社会・行政的な視点からも文化・美術的な視点からも注目される事業であると考えられる事から、調査研究委員会において見学会が提案されました。それを受けて協会設立15周年記念企画事業の一つとして実施されたものです。



aaca見学会に参加して

aaca理事
KOBAYASHI HARUHITO
小林治人
東京都調布市染地1－10－72

「越後妻有アートトリエンナーレ2003見学会に参加して」

平成15年8月24日、AACA法人化15周年記念企画事業として実施された「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2003」見学会に参加する当協会の参加者36名はJR越後湯沢駅東口に正午集合した。参加者は、道路事情から2台の小型バスに分乗した。

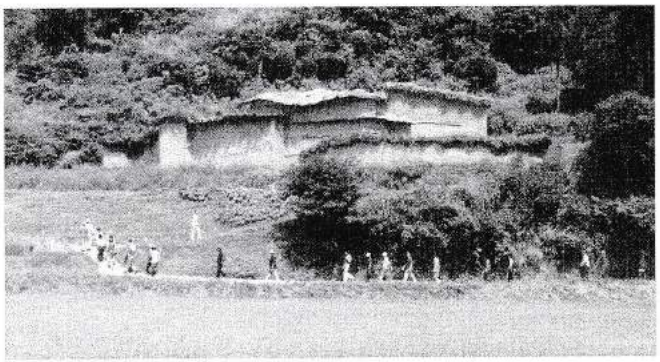
解説は1号車石井博美さん、2号高橋園子さん（お二人ともアートフロントギャラリー所属）にしていただいた。

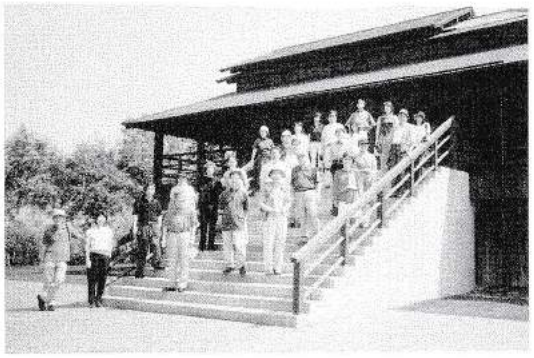
見学した成果について結論から言うと、「美景創造」を標榜し、「設景家」と自称する私の立場から言えば、全体的に大変心地よい刺激を受けることが出来た。

何が、なぜ心地良かったのか考えてみた。溢れるばかりの緑、信濃川の河岸段丘に展開する棚田と里山、これらの地域の大地を熟読して、作家の感性と地域環境が融合して、正に美景を表現していたからである。「設景」の概念は、人と大地の関係を科学的・生態的に理解し、そこに芸術的な感性を調和融合させることである。と考えてきたがそれが実現していることを実感できたからである。

今までは芸術作品の多くは美術館の中、あるいは都市街路などに展示されることが多く。人工的な空間に、光など人工的な演出によって作品の価値を増幅させることが中心であったものが、ここでは緑の大地がキャンバスになり、移り変わる季節、天象、人々の営為が綾なして、空間的にもスケール感があったということである。単に視覚的な美しさばかりを追求するのではなく、目に見えない地域の大地・地域の住人の物語が織り込まれていた。この試みは、表層的な見え方のみに作家が気をとられた場合、粗大ゴミと呼ばれる危険も内包している。しかし、今回触れた作品は、地域の人々の参加を促し、通常アートと関係が無いと考えていた多くの人々に、アートする目を見開かせ、ものづくりの楽しみに目覚めさせた。古郡弘氏の（盆景－）は地域人との協働の成果として印象的であった。会期後は取り壊されると聞いたが、そのことによって、心象風景として参加した地元の人々、作品を見た人の心の奥に記憶されることによってさらに意義深い作品となる。

いずれにせよこの催しは、今後の美しい国土運営を推進する上で先駆けとなり、新鮮な刺激を世界に向けて発信するだろう。人類の移動手段が進む中、移動文化・観光拠点として、人々を引き寄せ、地域づくりにも貢献するだろう。総合デイレクター、北川フラムさんはじめ関係者のご努力に敬意を表し報告とします。お世話になった皆様に御礼申し上げます。





「盆景にむかう人の景」

15周年記念事業参加者

aaca見学会に参加して

アートアソシエイツ八恩
KURAMOTO KIKUKO
倉本紀久子

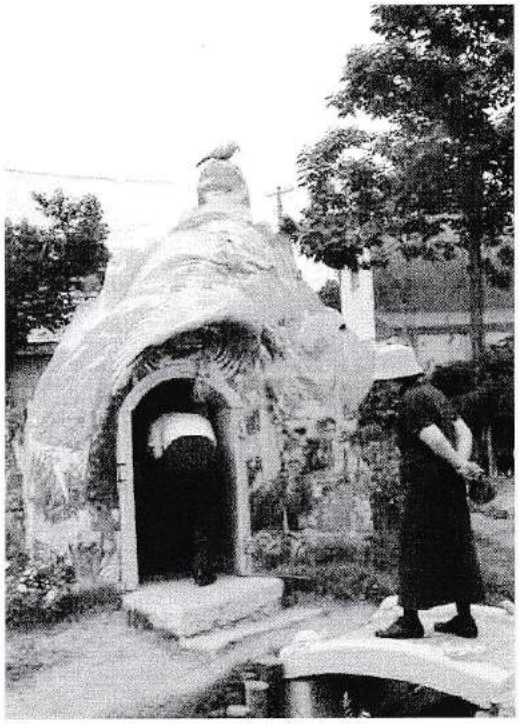
東京都千代田区九段南2−2−8−410
TEL03−5213−5453

「大地の芸術祭―越後妻有アートトリエンナーレ2003」から

かささぎ（鵲）は朝鮮半島、台湾、北九州に生息し、別名朝鮮烏ともいうカラス科の鳥である。津南町（つなんまち）上野（うわの）集落の「かささぎたちの家」は韓国のキム・クーハン（金九漢）による作品で、トリエンナーレの作品を巡りながら坂道をのぼっていくとふいに現れる小ぶりな建物である。かわいらしい花の咲く庭の真ん中におとぎ話に出てくるようなふしぎなかたちをした小屋がしつらえられており、屋根にはかささぎたちが翼を休めている。庭の周囲にはせせらぎが流れ、水車が回りメダカが群れをなして泳いでいる。構造体は一ヶ月かけて丸ごと焼かれた陶製で、「森羅万象、天地本處」の物語が壁に描かれている。手跡の温かさが伝わってくる小屋は外から見てきもちよく、中に入って居心地のよい造形で、ここを訪れた人たちすべて―こどもからおとなまで―が楽しめたのではないだろうか。どこかにありそうでどこにもないその風景は、なぜか懐かしい気分を人にもたらしてくれる。

聞けばこの建物の原材料は津南町の土で、制作・焼成にあたっては地元住民やボランティアのこへび隊合わせて約30人が協力したという。作品作りにかかわった集落の方から直接話をうかがう機会を得たが、試行錯誤を重ねたこと、作家と住民が知恵を出し合ったこと、交代で窯番をしたことなど、作家と協働で作品を作り上げたことへの満足と喜びがその言葉から伝わってきたものだ。「大地の芸術」というコンセプトが、ここでは人と土地とが一体となって実現されていたように思う。懐かしさを覚えるのはそのためだ。

七夕の夜、牽牛と織女はかささぎが翼を並べて天の河に架けるという「かささぎの橋」を渡って出会うといわれているが、「かささぎたちの家」は作家と地域住民や訪れた人たち、韓国と日本というように、多様な背景を持った人々や異文化が出会う場所、架け橋となっていた。今回私が見ることのできた四十余作品のなかでも特異な成功例として取りあげたゆえんである。



aaca

社団法人日本建築美術工芸協会15周年記念展覧会

技・業

わざ　わざ

応募要項

ご挨拶

21世紀、日本は世界を凌駕する繊細な感性に恵まれた国民的資質を生かして、文化大国として世界の平和に貢献することであるとする意見が聞かれる昨今です。

わが国文化活動の先駆的組織であるaacaでは、設立15周年を記念して“技（わざ）・業（わざ）”展を別紙ご案内の内容で開催することといたしました。aaca賞・芦原義信賞受賞作品のほか文化庁海外派遣作家作品、会員作品、法人会員の斯界を凌駕する技と業を展示して、出展作家と法人会員の存在・実績を広く社会に紹介することを意図したものであります。

15周年記念事業実行委員長
近　江　　栄

江戸東京博物館展示

aaca賞・芦原賞受賞作品・文化庁在外派遣作家作品・会員作家作品
法人会員の技・業作品・会員のコラボレーション作品

作品搬入日時	2004年2月5日（木）9：00～17：00まで　展示設置　13：00～18：00 搬入場所　江戸東京博物館１階会議室
展示期間	2004年2月6日（金）～12日（木）9：00～17：00まで （木・金曜日は22：00まで開館　9日は休館）
展示場所	江戸東京博物館　１階　会議室
主　催	社団法人　日本建築美術工芸協会
共　催	江戸東京博物館（財団法人東京都歴史文化財団） （東京都墨田区横網1-4-1　TEL03-3626-9974　FAX03-3626-8001）
後　援	文化庁・日本建築学会
オープニングパーティ	2004年2月6日（金）17：00　場所：館内レストラン

aaca会員募集

協会では会員を募集しております。
お知り合いの方をご推薦ください。
詳細は事務局まで
お問い合わせ03-3457-7998